

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	岩手県	番号	2
-------	-----	----	---

推進地区名	推進校名	児童生徒数
洋野町	洋野町立種市小学校	217

○ 調査研究の内容

1. 推進地域における取組

(1) 地域の実情や課題に即した学力向上推進計画の策定

- ・児童生徒一人ひとりの学力を保障する観点から、現在の平均点による集団の把握に加え、集団の分布状況に着目できるようにヒストグラムによる分析を重視し、各学校が分布状況を改善するための授業に取り組むような学力向上システムを構築。
- ・洋野町学力向上対策委員会において、各校の「学力向上戦略マップ」を作成。

(2) 本調査研究の円滑な実施のために行った指導・助言の状況

①県学力向上実践研究推進協議会(連絡協議会)の実施(第1回 H25.10.18 第2回 H26.2.21)

- ・授業参観を行い、具体的場面の指導に基づいた協議と指導・助言。
- ・第1回において、研究の進捗状況の確認と方向性の修正について助言。
- ・第2回において、研究の検証を実際の生徒の姿と授業場面で評価・助言。

②洋野町教育委員会指定 洋野町立種市小学校 学校公開への支援

- ・授業づくりの事前検討において、推進委員から指導・助言。
- ・研究推進委員がシンポジストとして、「読解力を育む言語活動」について討論。

③校内研究会における研究推進委員からの指導・助言

- ・研究推進に関わる授業づくり支援と研究協議における指導・助言

④県教育研究発表会 国語部会において、文部科学省富山哲也調査官からの助言

2. 推進地区における取組

(1) 意図や目的を踏まえ、条件に合わせて適切に表現する力を育てるために

- ①洋野町教育課程研究大会を開催し、「与える授業」から「引き出す授業」への転換を研修。
- ②町内全学校において全国学力・学習状況調査を解き、授業改善に向けての協議を実施。

(2) 二極化や中間層が厚い実態を踏まえた授業改善や指導体制を構築するために

- ①推進校において、具体的な授業改善を提案する学校公開と研究協議の開催。
- ②洋野町学力向上対策委員会において、各校の「学力向上戦略マップ」を作成。

(3) 学びの残る授業となるよう指導者の授業力向上を図るために

- ①諸調査の分析・活用に関わる指導主事の学校訪問の実施。
- ②管外研修視察の実施と研修レポート共有のための情報発信。

3. 推進校における取組

(1) 表現まで意識した読解力の向上を目指した単元を構想するために

- ①国語科における「単元を貫く言語活動」を具現化した授業実践。
- ②読解力習得の4観点(情報の取り出し・解釈・熟考、評価・表現)を明確にした指導過程の設定。

(2) 読解単元での第二次における指導の工夫・改善のために

- ①具体的な授業改善を提案する学校公開と研究協議の開催。

(3) 研究課題解決に迫るための研究推進体制の確立と同僚性の構築のために

- ①授業実践・研究協議後に指導改善をねらいとした改善版指導案の作成。
- ②児童の実態把握・評価のための集成シートの活用。
- ③学習環境整備等、学びの土台作りを構築する学習支援部の設定。

○調査研究の成果

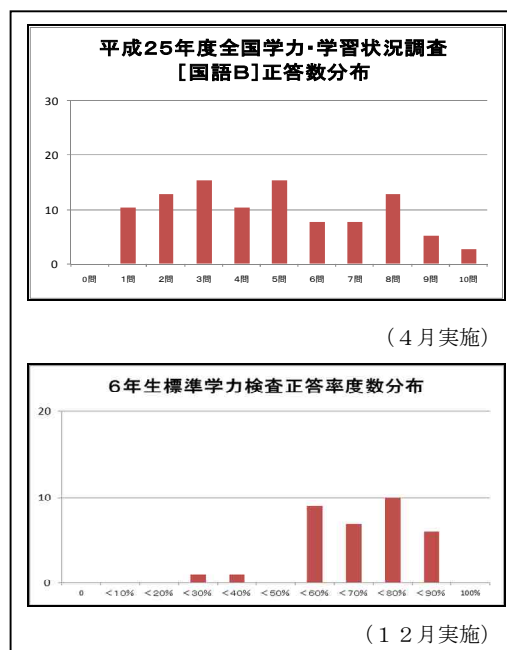
1. 推進校における取組の成果

- ・児童の実態と指導者が身に付けさせたい力を明らかにした構想から、単元を貫く言語活動を位置付けたことにより、指導のねらいが明確になり、児童の学習に対する意識や意欲の高まりがみられた。
- ・諸調査をヒストグラム等で分析し、児童の実態を集成シートに蓄積することで、下位層の底上げが図られ、二極化傾向から理想とする山型ヒストグラムに近付いている。
- ・授業実践、研究協議に改善版の指導案を作成することにより、研究会や日常の授業づくりの話題となり、授業改善を意識した同僚性の高まりが感じられる。

2. 調査研究全体の成果

(1) 全国学力・学習状況調査、岩手県学習定着度状況調査による学力の把握と分析

- ・右のグラフのとおり、4月の全国学力・学習状況調査で二極化傾向が見られた6年生は、12月実施の標準学力検査(東京書籍)において、正答率のヒストグラムみると下位層の児童の伸びが見られた。
- ・下位層の児童の底上げが図られたのは、下位層の児童の実態を見取り、本時身につけたい力はどうであったかという視点で常に工夫・改善を図ってきたことと、学習への興味関心を引く単元構想であったことが考えられる。
- ・県学習定着度状況調査(4,5年生10月実施)においても、若干の二極化傾向は見られるものの全体的に右よりの山型にヒストグラムが現れた。このことから、学校全体の課題が授業で取り組まれたことがわかる。



(2) 学力向上推進協議会による研究体制と授業改善に向けた取組に対する評価

- ・第2回学力向上推進協議会において、推進地区及び推進校の研究体制と授業参観を行い児童の姿について、協議と評価を行った。教師の学び続ける姿勢から推進校の同僚性の高さと授業中の児童の取組と諸調査の結果から徐々に成果が上がっていることが確認された。

(3) 学校公開及び県教育研究発表における提案に対する参加者の反応（アンケート）

- ・学校公開に 191 名、県教育研究発表会に 246 名が参加し、熱心な研究協議が行われた。
- ・アンケート結果より、「子どもたちが意欲的に授業に向かっていた。何をどうするか見通しがもてる授業になっていた」「ゴールを示し、やることを明確にすることの必要性を感じた」「職員全員が研究内容、方法を共通理解し、研究を進めていた」「授業改善が学力向上の一番の柱である」等、推進校の授業改善への取組が児童の学力向上へつながっていること、職員の研究体制が充実していることに対する記述が多く見られた。
- ・特に「授業者の発問が読解力習得の 4 観点（情報の取り出し・解釈・熟考、評価・表現）を明確にしたものだったか」という設問に対し、94%の参加者が肯定的な評価を行っていることから、推進校における授業改善の取組が具体的な授業の姿として表れたことがわかる。

3. 取組の成果の普及

(1) 成果発表会

- ①H25. 10. 31 洋野町教育委員会指定 洋野町立種市小学校 学校公開研究会（191 名参加）
- ②H26. 02. 14 岩手県教育研究発表会 国語分科会（246 名参加）

(2) 研修会等の開催

- ①H25. 08. 26 洋野町教育課程研究大会 教育講演会及び授業研究会

(3) インターネットによる情報提供

- ①洋野町立種市小学校 HP（学校の研究）

<http://www.geocities.jp/taneichisho/>

- ②岩手県総合教育センターHP（岩手県教育研究発表会資料）

<http://ww1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryou/index.html#01>

○ 今後の課題

- ・各市町村や学校が学習定着の分布状況を改善するために授業に取り組むような学力向上システムをさらに構築すること。
- ・指導力向上の効果的な取組として、推進校の授業提案・研究協議後に授業者による指導案の改善版の作成等について広く紹介すること。
- ・地域による学力の差、学校間格差をなくすために、教育事務所及び市町村教育委員会における学力向上対策を積極的に支援すること。

(様式2)

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究(小・中学校)」
平成25年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	岩手県	番号	2
-------	-----	----	---

推進地区名	洋野町
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組の内容

1 重点課題

- (1) 意図や目的を踏まえ、条件に合わせて適切に表現する力を育てること
- (2) 二極化や中下位層が厚い実態を踏まえた授業改善や指導體制を構築すること
- (3) 学びの残る授業となるよう指導者の授業力の向上を図ること

2 事業の概要

(1) 重点課題への取組状況

① 意図や目的を踏まえ、条件に合わせて適切に表現する力を育てること

平成24年度岩手県学習定着度状況調査結果から、中学1年の数学、英語、中学2年の社会はほぼ県平均並み(県を100として97~101)であるが、それ以外の小4から中2の各教科は県平均を下回っていた(89~94)。県平均を下回る教科を観点別で見ると、国語、英語については、「読むこと」「書くこと」、算数・数学について「数学的な考え方」「数学的な見方や考え方」が他の観点に比べて低い傾向であった。

要因として、意図や目的を踏まえ、条件に合わせて適切に表現する力が弱いと考え、その力を育てるための手立てとして以下の3点に取り組んだ。

<取組1> 洋野町教育課程研究大会において教育講演会を開催

演題 「学習指導要領を踏まえた、これから求められる授業」

～知識・技能を「活用する力」を育てるには～

講師 岩手大学教育学部 准教授 立花 正男 先生

- 講演では、普段の授業で、知識・技能を身につけるだけを目指すのではなく、それを活用できる段階にまで子どもたちを育てていかなければならないこと、そのためには、授業の中で意図的・計画的に「問い」が生まれる場面をつくっていく必要があること、既習が活かせるような連続する授業づくりが大切であることなど、具体的に教えていただいた。「与える授業」から「引き出す授業」をキーワードに、町全体で授業実践をしていくこととした。

＜取組 2＞全教員による全国学力・学習状況調査の活用問題の実施および授業改善に向けての協議

- 国語や算数・数学に関わらず、全ての教科部会において、平成 25 年度全国学力・学習状況調査の活用問題の一部（小学校国語、小学校算数）を実際に解いてもらい、「今、求められている学力」について共通理解を図り、その上で、各教科の授業実践において行うべき手立てについて協議を行った。

＜取組 3＞推進校に対する指導・助言

- 意図や目的を踏まえ、条件に合わせて適切に表現する力を育てるために、推進校の授業実践について、発問の意図を明らかにするよう指導した。
- 児童の思考を促すためには、授業者の発問に、本校のねらう「読解力の観点」（情報の取出し、解釈、熟考・評価、表現）に沿った明確な意図を持たせる必要がある。推進校においては、発問の文言の吟味、発問の系統性、単位時間の発問と単元の発問の関連性を明らかにしたうえで、実践を重ねるよう指導した。

② **二極化や中下位層が厚い実態を踏まえた授業改善や指導体制を構築すること**

平成 24 年度岩手県学習定着度状況調査、正答数ヒストグラムからは、教科や学年により若干異なるものの、二極化構造や上位層が薄く中下位層が厚い傾向が読み取れる。

一部の上位層の発言だけで授業を進めたり、教師の説明中心で授業が進めたりしていること、一人ひとりの児童生徒の状況について十分な実態把握がないままに授業を行っていること等が要因として考えられる。

そこで、推進校である種市小学校の実践を学校公開で広げることと、学力向上対策委員会において全校体制での学力向上取組を構想することとした。

＜取組 1＞洋野町立種市小学校学校公開による授業公開及び研究協議

- 全学年、全学級の国語の授業を公開し、表現まで意識した読解力の向上を目指した単元構想のあり方と読解単元での第二次における指導の工夫改善について提案をしてもらった。また、筑波大学附属小学校 青山由紀先生による示範授業やシンポジウム「読解力を育む言語活動」において、言語活動のあり方について考える機会を設けた。

＜取組 2＞洋野町立種市小学校学校公開 参会者アンケートの実施

- 学校公開研究会により示された実践の意義を明らかにし、公開校である種市小学校がさらに研究を進めるとともに、洋野町の教職員がその意義を共有することによって授業力向上を図り、児童生徒の学力向上を図ることとした。

＜取組 3＞推進校に対する指導・助言

- 二極化や中下位層が厚い実態を踏まえた授業改善を推進するために、単元を貫く言語活動を設定し、児童に目的意識を持たせ、主体的に学習に取り組ませる必要がある。
- 推進校においては、単元を貫く言語活動および単位時間の言語活動の内容・手

順・意義の明確化、学習形態について工夫・改善を行い、児童にとって魅力ある単元を構成するよう指導した。

＜取組 4＞洋野町学力向上対策委員会「学力向上戦略マップ」構想

- 町内各学校の学力向上担当者（教務主任、研究主任）を対象に開催し、町内の学力の実態と課題について把握し、各校における「学力向上戦略マップ」を構想し、全校体制での学力向上取組に活かしてもらうこととした。

③ **学びの残る授業となるよう指導者の授業力の向上を図ること**

町内小中学校は小規模校が多く、その利点を生かせば、個々の児童生徒の見取りをより丁寧にし、個に対応した授業を行っていくことができる。各種調査の平均点ではなく、ヒストグラムや個人の経年変の様子から実態を分析し、それに対応した指導を探していく必要がある。一方で、教師が個のレベルに合わせて、指導すべき内容を狭めることがないよう、指導者の授業力の向上を図ることをねらいとして以下の2点に取り組んだ。

＜取組 1＞岩手県学習定着度状況調査後の指導主事による学校訪問指導

- 岩手県学習定着度状況調査の結果分析(C)と評価(A)、それを受けての手立ての計画(P)と実践(D)について、各校の状況を把握、指導のために学校訪問を行った。成果を上げている学校の取組について、校長会等で情報提供を行った。

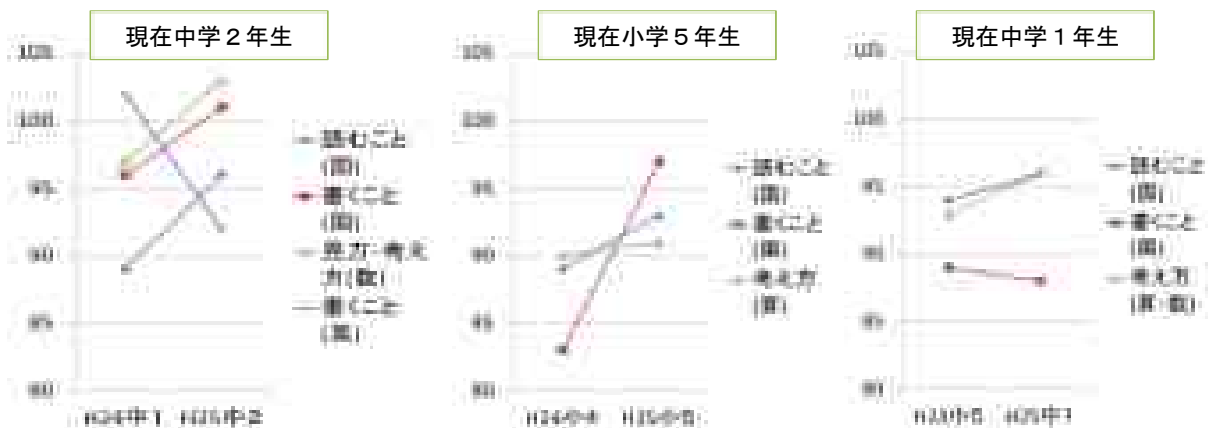
＜取組 2＞管外研修視察研修レポートの共有

- 管外で開催される学校公開等の研修視察に参加した教員から研修レポートを提出してもらい、町内幼・小・中学校に配信し、情報の共有化を図った。研究全般、教科、複式学級、特別支援学級等、多岐にわたる先進校視察により、各校に必要な情報を発信した。

3 事業の成果と課題

(1) **意図や目的を踏まえ、条件に合わせて適切に表現する力を育てること**

岩手県学習定着度状況調査の観点別結果をもとに、同一集団の経年比較をしたものが下のグラフである。



グラフの数値は、県平均を100としたときの町の平均点の割合を示すものである。

概ね3つの観点（読むこと、書くこと、数学的な見方・考え方）の結果は上向きである。一方で、英語については「書くこと」が大幅に下降しており、教科としての課題がある。また、上向きであるものの、県平均100までには至っていないことから、今後も継続した取組をしていく必要がある。

(2) 二極化や中下位層が厚い実態を踏まえた授業改善や指導体制を構築すること

① 洋野町立種市小学校学校公開 参会者アンケートの結果より …… **資料1**

一部の上位層の発言だけで授業を進めたり、教師の説明中心で授業が進めたりという状況を打開し、児童生徒が主体的に学習に参加する授業のあり方について、推進校に授業提案してもらった。「『単元を貫く言語活動』」が児童の思考力・判断力・表現力等の育成につながる活動となっていたか」という問いに対して、町内の参会者のアンケートでは、51%が「強く思う」と答えている。参観者の意識が高まり、各校に帰ってからの授業実践に活かしてほしいと考える。また、「発問の意図が明確であったか」という問いに対して、「強く思う」は43%にとどまっており、思考を促すための発問には、さらなる工夫が必要であることが分かる。

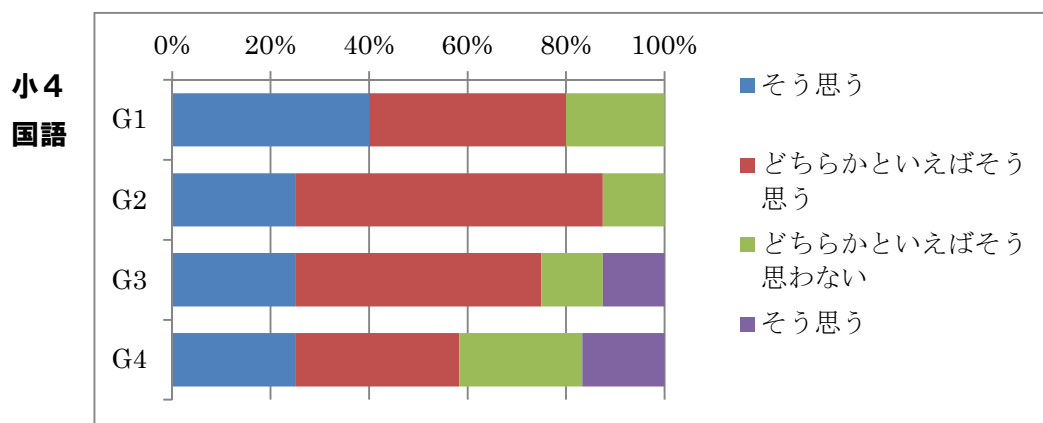
② 岩手県学習定着度状況調査のヒストグラムより …… **資料2**

二極化や中下位層が厚い実態が見えるのは、小4年国語と算数、小5国語と算数、中1数学と英語、中2の数学と英語である。学年が上がるにつれて国語のヒストグラムは山が右寄りになっているのに対して、算数・数学は学年が上がるにつれて山が崩れている。英語に関しては、算数・数学よりその傾向が顕著である。算数・数学は授業の影響を受けやすいと言われるだけに、国語よりも授業改善に真摯に取り組む必要がある。

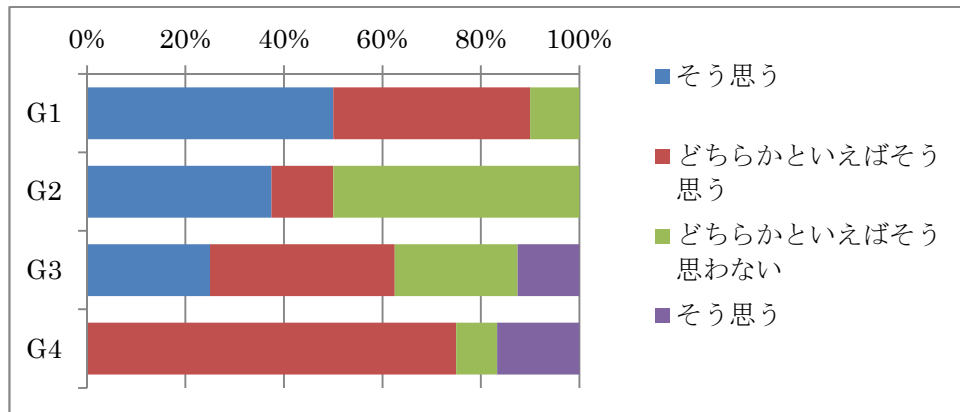
(3) 学びの残る授業となるよう指導者の授業力の向上を図ること

岩手県学習定着度状況調査小学校4年、5年国語と質問紙について、クロス集計したものが下のグラフである。

普段の授業で、はじめに授業の目標（めあて・ねらい）を確認していると思いますか。

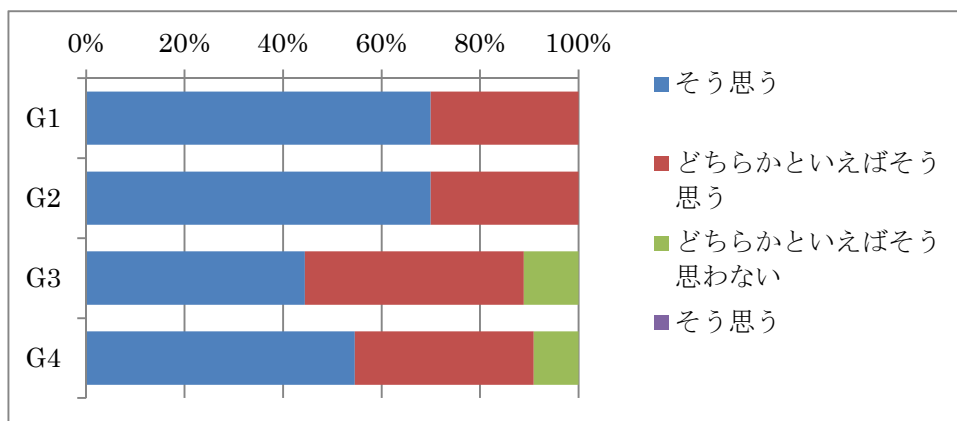


**小5
国語**

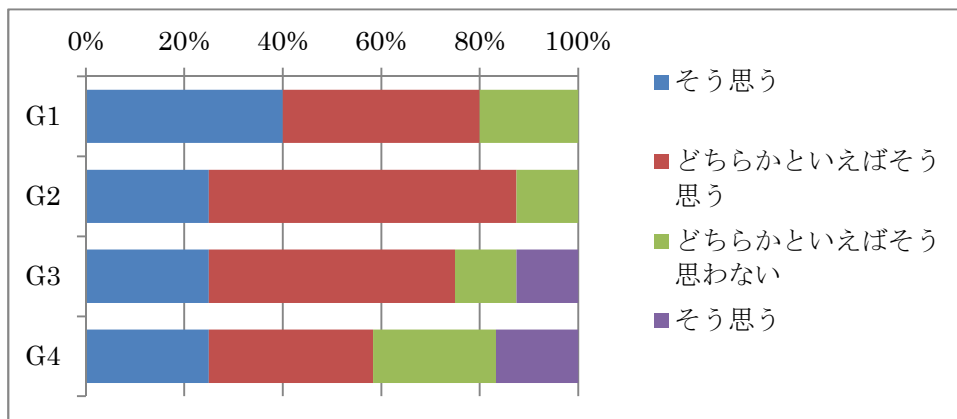


普段の授業で、最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。

**小4
国語**



**小5
国語**



授業のはじめに目標を確認していることと成績には強い相関がある。最後に学習の振り返る活動は、前述ほどではないものの、相関があるといえる。その要因として、どの授業でも導入時には学習課題が設定されるが、後半は振り返りの時間を設けることができないことがあることから、2つ目の相関が弱くなっていると考えられる。

今後は、「明確な目標の設定」と「振り返る活動」をどの授業、どの教科にも位置づけ、学力の向上を図っていく必要がある。

(4) 今後の課題と解決のための手立て

- ① 算数・数学および英語について、確かな学力をつけること。
- ② 全教科において基礎的・基本的な内容を活用できる力をつけること。

上記課題解決の手立てとして、次のことを行う。

- ・授業で「見通し・振り返り学習活動」を設けるとともに、教師だけでなく児童生徒がそのことを意識するよう見取りながら継続した活動を行う。
- ・全国学力・学習状況調査や岩手県学習定着度状況調査等を実態把握のツールとして位置づけ、学力向上を組織的に PDCA サイクルで取り組む。
- ・指導主事の学校訪問を通して、各学校に対して情報提供と適切な指導助言を行う。

「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（小・中学校）」
平成25年度委託事業完了報告書
【推進校】

都道府県名	岩手県	番号	2
-------	-----	----	---

推進校名	岩手県洋野町立種市小学校
------	--------------

○ 推進校として実施した研究内容

1. 重点課題

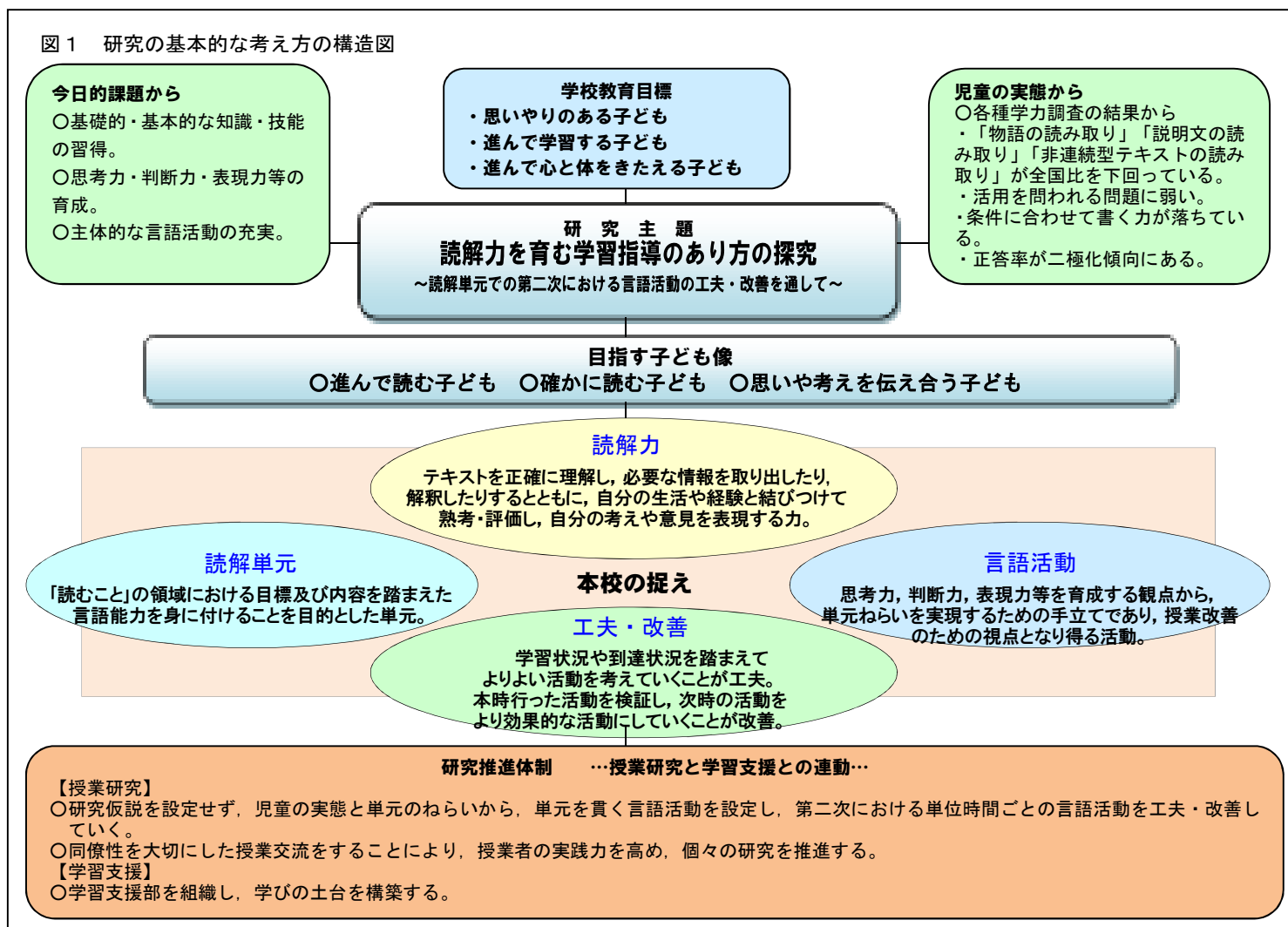
- ・表現まで意識した読解力の向上を目指した単元構想のあり方
- ・読解単元での第二次における指導の工夫・改善
- ・研究課題解決に迫るための研究推進体制の確立と同僚性の構築

2. 重点課題への取組状況

(1) 研究の基本的な考え方

以上の重点課題を踏まえ、以下の図1のように考え、研究を進めた。

図1 研究の基本的な考え方の構造図



(2) 表現まで意識した読解力の向上を目指した単元構想のあり方について

研究仮説を設定せず、児童の実態と単元のねらいから、単元を貫く言語活動を設定している。

児童の実態は、学力調査の問題で正答率の低かった問題や授業での活動の様子から把握する。単元のねらいについては、教材の特性に合わせて重点となる指導事項を精選、併せて、言語活動系統表を作成し系統性を明らかにした。

それを踏まえ、課題解決につなげるための読解力習得の4観点（「情報の取出し」「解釈」「熟考・評価」「表現」）を明確にした指導過程を設定、単元を構成した。

本校の「表現」は、主に「書いて表現すること」を意識して行っている。また、単元構成ごとに把握した児童の実態については、「集成シート」に記録し、次単元の構成や次年度の単元構成に活用できるようにした。（単元構想については、右図2「読解力を育む学習指導のあり方の探究」の単元構想図を参照）



図2 「読解力を育む学習指導のあり方の探究」の単元構想図

(3) 読解単元での第二次における指導の工夫・改善について

第二次の単位時間ごとの言語活動の工夫・改善は「本時の学習での児童の実態や付けたい力はどうか」という視点で行う。改善点を明らかにし次時の指導の工夫につなげるようにした。また、読解力習得の4観点をもとに児童の実態を把握し、この4観点に基づいて発問を考え、授業を展開するようにした。

【低学年の例】

3年生 筆者の説明の仕方を考えて、「食べ物変身ブック」で紹介しよう
「すがたをかえる大豆」

<p>表現まで意識した単元構想</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童の実態…事柄の順序などを考えながら内容を読む 【解釈】を問う問題が落ちている。 「食べ物変身ブック」を作るために…変身した複数の食べ物を分かり湯すく説明する必要がある。 分かりやすく説明するための必要条件を【解釈】させながら読ませたい。 	<p>本時の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 筆者の事例の順序を並べ変えることで、事例の説明には順序を考えて説明していることに気づかせる。 筆者の説明の順は、どのような順なのかを考えさせる発問【解釈】 	<p>児童の活動の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 形がなくなる順、できるまでの時間の順など答えることができた。しかし、その理由を、テキストの本文から確かめる時間が十分ではなかった。 	<p>次時の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時想起の場面で、考えた理由を本文の言葉で確かめた。 教師の考えた説明文の順序を考える活用の時間だったので、必ずノートに理由を書かせるようにした。
--	--	--	--

【高学年の例】

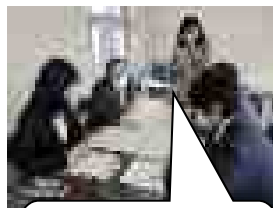
6年生 作品カードで伝えよう ～わたしの考える「○○」（賢治作品）
「やまなし」

<p>表現まで意識した単元構想</p> <ul style="list-style-type: none"> 児童の実態…全国学力・学習状況調査の結果を見ると、比べて読み、推薦している対象や理由をとらえる問題が落ちていた。正答を導き出すには、複数の情報を比較しながら読む力と文意を正確に読み取る力が必要と考えられる。 また、普段の児童実態として【解釈】が十分でないため【表現】する中身が確かなものとなっていない傾向が見られる。そのため、【解釈】の力を付けることをベースに置きつつ語彙を増やしたり、手段の幅を広げたりしたい。活動としては、自分の言葉で作品の主題をまとめさせるカード作りを設定した。 <p style="text-align: right;">別紙資料参照</p>	<p>本時の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> 5月の世界との比較・整理【状況・登場人物・視点をかえての解釈など】を行った上で解釈を深める。 【情報の取り出し】【解釈】 中心人物の確認とその他の登場人物との関係性から暗に示しているものを読み取らせる。【解釈】 ○○な存在、○○な世界などで表現させ、一人一人の表現を認めつつ、よいもの・自分の考えに合うものを使ってまとめるよう指示を出す。【表現】 	<p>児童の活動の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 比較することにより、各各の対象をよく見るようになった。その結果、「命」というテーマについて多様な考えや表現が出された。 なぜ登場人物の存在を確認したのか、児童は必要感を感じていなかった。そのため、何を表現したらよいかで迷う姿もあった。 いろいろな表現を真似したり、組み合わせたりして表現する児童が増えた。（特に低位の児童） 	<p>次時の改善</p> <ul style="list-style-type: none"> 「メッセージを読み解いていくために、何を手がかりにすればよいですか。」という指示を出し、自ら動く展開づくりをすればよかった。 本時のはじめに作品カード（5月）を取り出し、もう一度、ゴール像を明確にしてから授業をスタートさせた。
---	--	--	--

本校研究体制は、授業研究部と学習支援部とで構成されている。どちらの部も全員が所属している。授業研究部は、同僚性を大切に授業交流を推進している。基本は、低学年部会と高学年部会に分かれて事前研究会などを行うが、職員間で日常的に単元構想を話題にしたり、自主的参加のもとで授業を見合い協議したりするなど、反省的な授業研究が行われている。また、研究会では、ワークショップ型の研究会を行い、「付きたい力」と「言語活動の工夫・改善」、「単元構想」などを柱に観点を絞って協議してきた。そして、授業で課題とされた事項については、改善策を出し合うようにした。その内容を基にしながら「指導案【改善版】」を授業者が作成した。



協議の観点に沿って、それぞれが付箋に考えを記入する。



授業者は、各グループを回り、グループ協議の質問などに答えられるようにする。

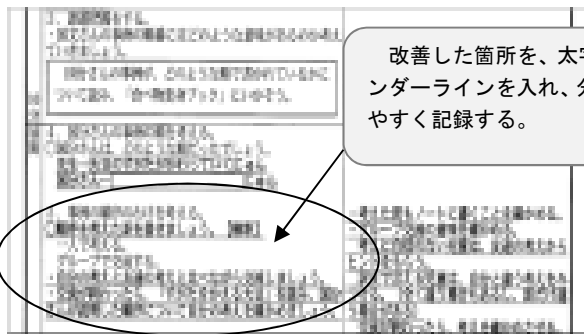


グループでは、司会者、記録者、発表者と役割を決め、話し合われたことをまとめて発表する。



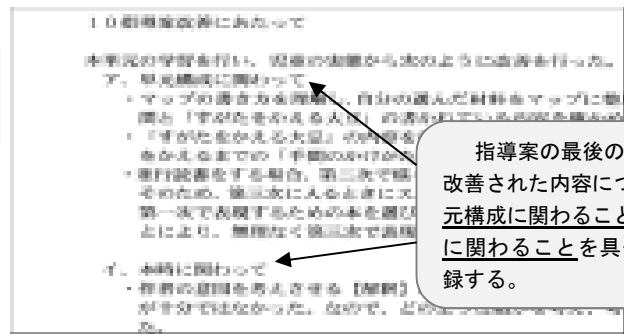
授業での児童の様子から以下の事について各グループで協議しまとめた。
①「単元を貫く言語活動としてのゴールの設定と第二次の構成」について
②「本時の展開の目標が達成される内容であったか」について

指導案【改善版】展開



改善した箇所を、太字・アンダーラインを入れ、分かりやすく記録する。

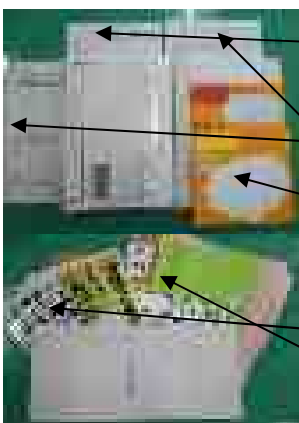
指導案【改善版】指導案改善にあたって



指導案の最後の項目に、改善された内容について、単元構成に関わることと、本時に関わることを具体的に記録する。

授業研究部の取組として系統的な指導も行った。「集成シートファイル」と「国語の学習バック」を活用し系統的な指導ができるようにした。6年間を見通し、系統的な指導ができるよう、また、それぞれの指導が次年度へつながるように指導の足跡を残すようにした。

「集成シートファイル」は、集成シート、児童へのアンケートを分析したもの、授業で使ったワークシートや言語活動で作ったもの、指導案【改善版】が入っている。



- ・集成シート…児童の実態把握のためのシート
学力調査の結果を基に、読解力習得の4観点から落ちている事項などについて分析をし、記録する。
- ・アンケート…児童に意識調査を行い、個々の実態把握や学級全体の意識の変化などを捉える。
- ・指導案【改善版】…次年度の指導に生かす。
- ・言語活動の具体物…単元のゴールで完成した具体物や言語活動で使ったワークシートなどを残す。
- ・種市スタンダード…それぞれの学年に応じた学習の基本的な決まりを示したものを確かめながら指導をする。

- ・国語の学習用語…国語の学習で必ずおさえない内容やその学年でおさえた内容とその言葉。
- ・言語活動で使った掲示物…単元で付きたい力を意識しまとめた内容のものや、挿絵など。

学習支援部は、児童の学びの土台の構築を図っている。「①表現活動・習熟テスト」「②学習環境整備」「③種市スタンダード」「④調査・検証」の4つから構成される。

【①表現活動・習熟テスト】

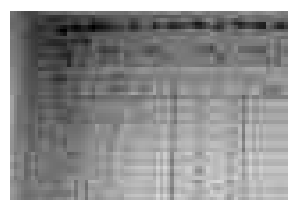
5分間視写(写真①)、音読カード、音読朝会(写真②)種小チャレンジテストの計画と運営を行う。

【②学習環境整備】

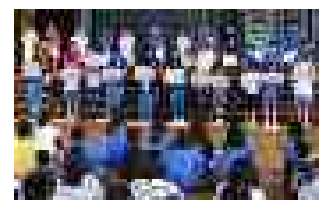
渡り廊下を「学び合いロード」(写真③④)と名付け、国語に関する掲示を行う。

【③種市スタンダード】

各学年の発達段階に応じた学習の決まりを提示し(写真⑤)、教室の掲示物や担任必携冊子にまとめ通理解を



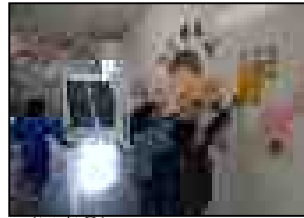
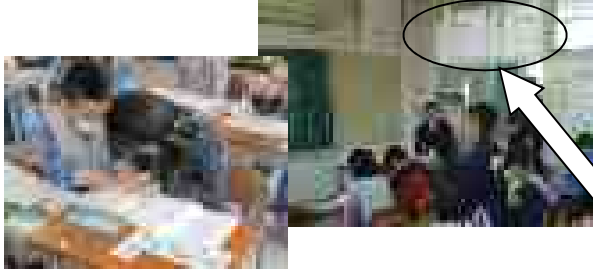
(写真①)
・視写取組 表2年生



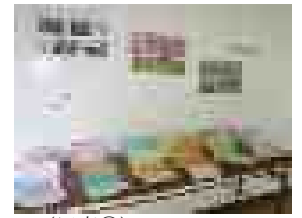
(写真②)
・音読集会1年生「おむすびころりん」紙芝居の紹介

る。また、児童の語彙力を高めるための辞書引き（写真⑥）の系統的な活用の提示などを行っている。

(写真⑤) 学習のきまりの教室掲

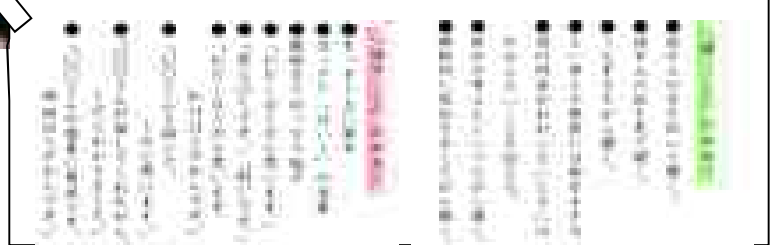


(写真③) 体の慣用句の掲示



(写真④) 4年生「本の紹介カード」

(写真⑥) 授業中での辞書活用
(テキストにある分からない言葉を進んで調べる児童)



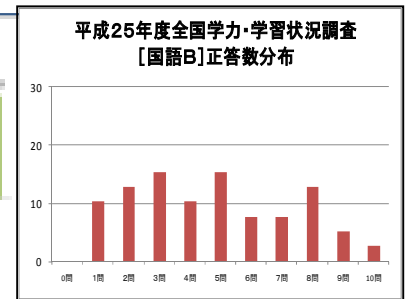
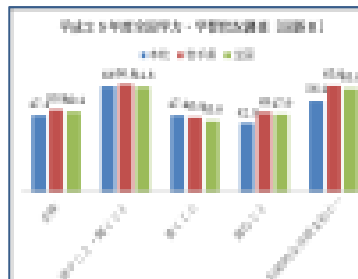
[④調査・検証]

児童の実態に関するアンケートの提案・実施及び分析を行う。
各種学力調査の詳細な分析及び活用方法の提案をする。
校内研究に基づいた学力の向上についての検証を行う。

3. 調査研究の成果の把握・検証

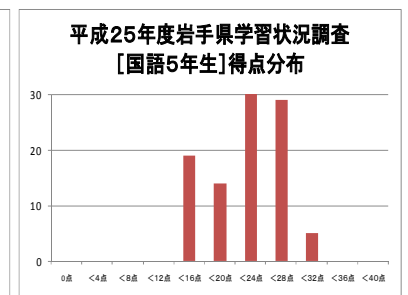
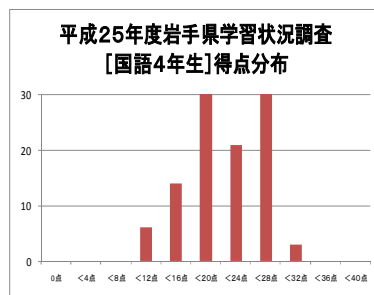
(1) 平成25年度全国学力・学習状況調査（4月24日実施）の結果

- ・国語A問題、国語B問題においても全国平均を下回る結果となった。
- ・「読むこと」領域は、国語A問題、国語B問題において全国比を大きく下回った。
- ・正答率のヒストグラムを見ると、国語Aは中間層の児童が多い山型であるが、国語Bは上位層と下位層の児童が多く中間層の児童が少ない双峰型である。
- ・特に「読むこと」領域の問題では、解釈を問う問題の誤答が多かった。
- ・B問題では、2人の推薦文を比べて読み、推薦している対象や理由を捉える問題の誤答が多かった。

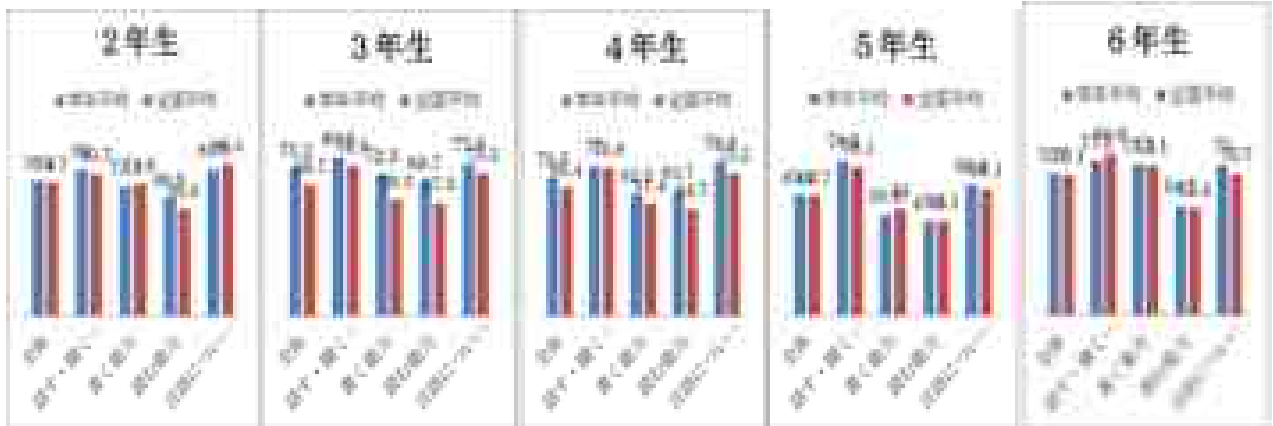


(2) 平成25年度岩手県学習定着度状況調査（10月2日実施）の結果

- ・4年生5年生ともに、県平均を上回っている。
- ・課題である「読むこと」領域は、4年生5年生ともに、県平均を上回っている。
- ・特に「書くこと」領域は、4年生5年生ともに、県平均を大きく上回っている。
- ・4年生5年生ともに、「話すこと聞くこと」の領域に課題がみられる。
- ・得点分布を見ると、4年生は、下位層の児童の割合が多い山型である。5年生は、下位層の児童の割合が少なく、中間層と上位層の児童の割合が多い山型である。

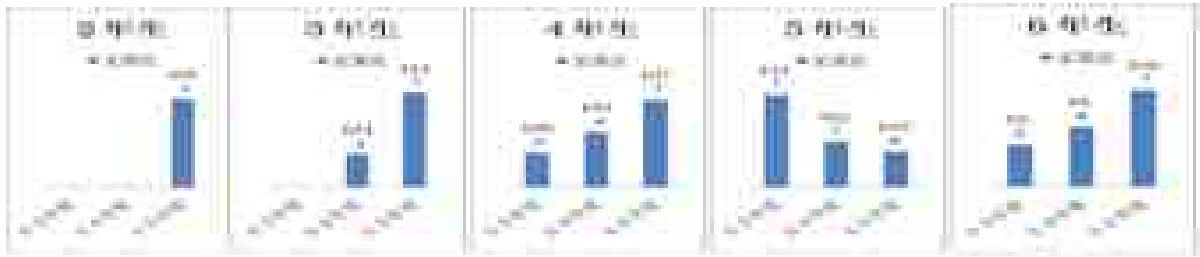


(3) 平成25年教研式標準学力検査（CRT）（12月4日実施）の結果

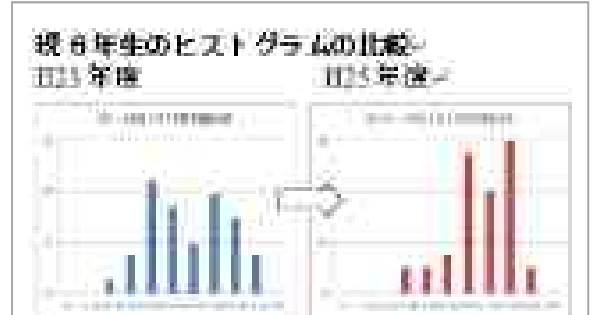


- ・全体の結果を見ると、どの学年も全国平均を上回る結果となった。
- ・課題であった「読むこと」領域が、どの学年も全国平均を上回る結果となった。

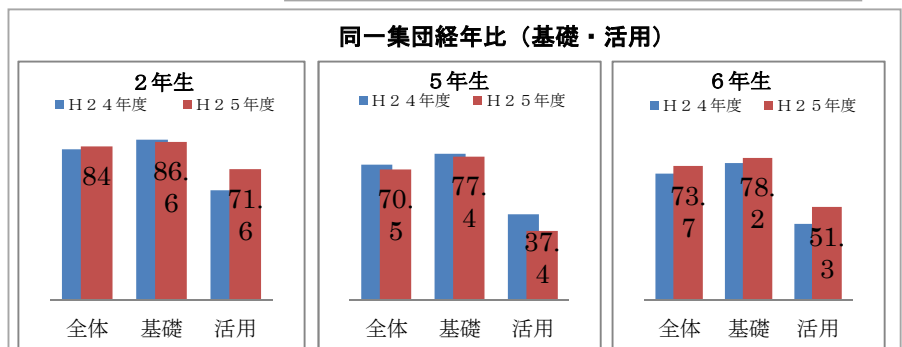
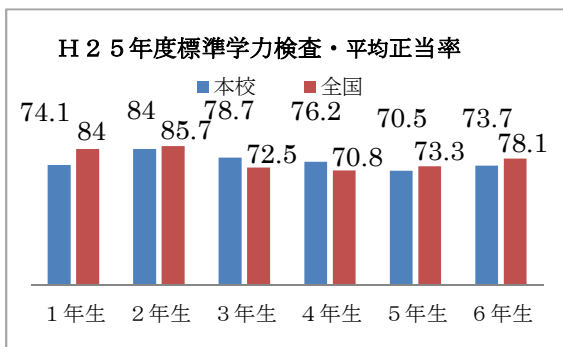
(4) 同一集団経年比較（「教研式標準学力検査（CRT）」より）



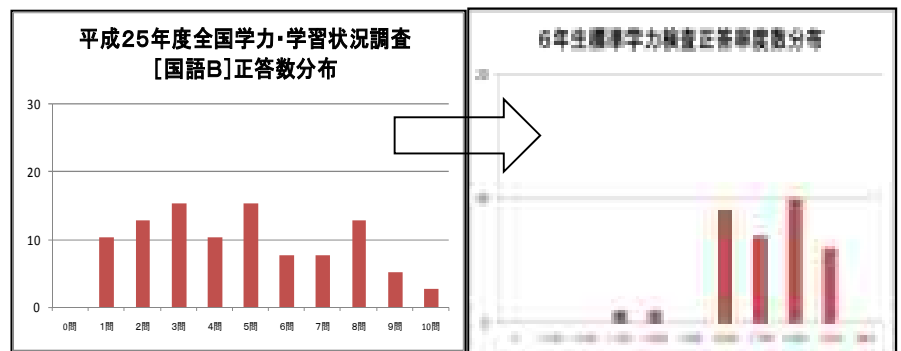
- ほとんどの学年において、国語の総合得点が高くなっている。
- 5年生の総合得点の伸びが大きくないものの、全国平均と比べると平均を超えている。しかし、領域別に見ると「読むこと」領域の平均全国比は99.3%、「書くこと」領域は94%と低かった。
- 現6年生のヒストグラムをみると、H23年度の結果は、下位層と上位層が多い二極化傾向にあったものが、H25年度の結果を見ると下位層の児童が減少し、中間層の児童が増加した。



(5) 平成25年度標準学力検査（東京書籍）（12月5日実施）



- 3年生と4年生は、全国平均を上回る結果となった。
- 2年生、6年生は、全国平均を下回ったものの、経年で比較してみると2年生と6年生は、活用を問う問題の伸びが見られる。
- 1年生、5年生は、大きな伸びが見られなかった。それには、1年生30人、5年生38人の多人数学級の細かな児童の実態把握と一人一人への支援の難しさがあったと考えられる。
- 二極化傾向にあった6年生は、正答率のヒストグラムみると下位層の児童の伸びが見られる。



(6) 標準学力検査の「読むこと」領域での、正答率の低かった問題についての検証

学年	学年正答率	全国正答率	内容
1年生	74.2	85.4	事柄の順序などを考えながら、内容を読み取る【解釈】
2年生	57.7	71.2	時間的な順序、事柄の順序を考えながら場面の様子を読み取る【解釈】
3年生	26.3	37.8	文章の要点に注意して読み取る【解釈】
4年生	47.6	58.4	登場人物の気持ちの変化を読み取る【解釈】
5年生	18.4	39.5	段落の内容を読み取る【解釈】
6年生	65.0	74.6	段落のまとまりを考えながら読み取る【解釈】

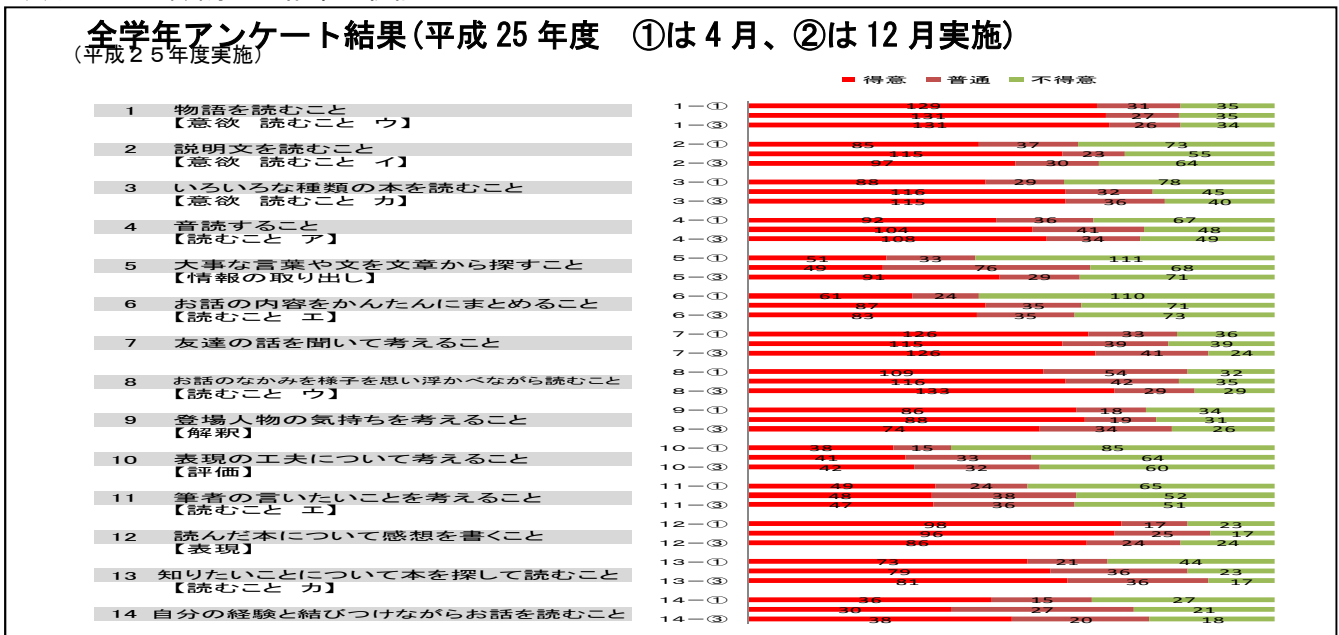
- 1年生は、言葉の意味を十分理解できていない。似たような言葉を間違えて選択していた。問題文の内容がテキストの文章のどこに書かれているか確かめながら読むことが十分とはいえなかった。【情報の取り出し】をさせながらどこに何が書かれているか確かめる学習が必要と考えられる。
- 2年生は、登場人物がたくさん出てきた場合、誰が何をしたか整理しながら読むことが十分ではなかった。主語と述語に着目させながら正確に読ませる必要がある。
- 3年生は、問題の選択肢の内容と本文の内容と比べ同じ内容を選ぶ問題が落ちていた。2つの内容を比べ【解釈】するような学習が必要と考えられる。
- 4年生は、隠れた主語であったため、登場人物の行動を整理し切れなかった。また、行動の読み取りが中心となり会話文から気持ちを読み取ることも十分とは言えなかった。問題も要約された表に言葉を書き入れるものだったので、どのように【表現】したらよいか分からなかった児童もいたと考えられる。登場人物の行動と会話などを整理しながら簡単にまとめられるような学習の仕方が必要だと考えられる。

- ・5年生は、段落をまとまり毎に分ける際、文章を最後まで読まず、接続語を手がかりに分ける児童が多いことがうかがえる。文章の内容を考えさせながら最後まで読ませる必要がある。
- ・6年生は、「事実」と「意見」とを整理しながら読むことが難しかったようだ。具体と抽象が混じっている段を読み、筆者の主張のように感じる部分があるようだ。「事実」と「意見」とを整理させながら、段落のまとまりを考えさせる必要がある。

(7) 今年度の各種学力検査からの総合的な検証

- ・「読むこと」領域の得点高かったのは、読解単元での第二次における言語活動の工夫・改善の成果と考えられる。また、授業研究だけではなく、学習支援部のとの連動が学習の定着につながったと考えられる。
- ・「書くこと」領域の得点が高かったのは、読解力の4観点の「表現」に意図的に「書いて表現する」活動を取り入れたことが考えられる。
- ・下位層の児童の底上げが図られたのは、下位層の児童の実態を見取り、本時身につけたい力はどうであったかという視点で常に工夫・改善を図ってきたことと、学習への興味関心を引く単元構想であったことが考えられる。
- ・各学年の誤答分析から、文章を大きく読み、内容のだいたいを整理しながら読むことが十分ではなかった。これは、語彙の不足が考えられる。また、多様な文章表現に対応できず内容を十分に理解できなかったと考えられる。

(8) 児童の意識調査の結果・検証



- ・「物語や説明文を読むこと」を得意とする児童が増えた。(質問1、2)「読むこと」の学習が充実し、一人ひとりの自信につながったと思われる。
- ・多くの児童が様々な種類の図書に接している。(質問3、13)これは並行読書、読書カードの取組を全校で行ったことにより、読書の幅を広げることにつながったからだと考えられる。
- ・「大事な言葉や文を文章からさがすこと」を得意とする児童の減少がみられた。(質問5)情報の取り出しを主体とした授業展開を行うことにより、大事な言葉や文を文章から探すことに苦手意識を持つ児童が減少したと考えられる。
- ・「表現の工夫について考える」項目でも苦手とする児童の減少が見られる。(質問10)表現の工夫について考えさせる「読解力習得の4観点【熟考・評価】」の授業展開の積み重ねによるものと考えられる。
- ・アンケート全体を通し、不得意と感じている児童数が多い項目で減少していることから、苦手意識を持っていた児童へのアプローチやサポートは充実してきたと考えられる。

(9) 成果

- ・児童の実態と身につけたい力を明らかにした構想をもとに、単元を貫く言語活動を位置付けることにより、指導のねらいが明確になるとともに、児童の学習に対する意識や意欲の高まりが見られるようになった。
- ・岩手県学習定着度状況調査の結果から、これまで課題としてあげられていた正答率ヒストグラムの二極化傾向は、下位層の底上げが図られ、中間層が増加しほぼ理想的な山型となった。
- ・授業交流したり、日常的に授業について話題にしたりすることにより、互いの授業づくりの刺激にもなり、同僚性の高まりが感じられた。
- ・授業研究と学習支援を連動させ、児童に発表の場や学び合いの場(音読発表会、学習掲示など)を設けることにより、音読を得意とする児童やいろいろな本を進んで読む児童が増えた。また、他学年の発表に接することで、発表意欲が喚起され、学習に対する期待や関心が高まっている。

4. 今後の課題

- ・単元の目標を実現させるために魅力ある言語活動を位置づけた授業実践の蓄積と言語活動の系統を見直す。
- ・目標を達成するための工夫と改善が進められるように、児童の実態把握の観点と評価のあり方についてさらに検討を加え、共通理解を図る。
- ・学習支援部の取組と児童の実態とを関連付けながら、内容や計画の見直しを行い、より具体的で系統性のあるものにする。